

# 国語科における豊かな言語力を育てる授業の在り方についての研究

## ～小・中学校の連携を通して「思考力」を育む指導開発～

南国市立後免野田小学校 教諭 伊吹 真美  
高知県教育センター 指導主事 松岡 マミ

本研究では、高知県の小・中学校国語科の課題解決のために、「全国学力・学習状況調査」（国語A・B）で学力階層の上位ほど、国語科の授業に対する好きという感情（以下「国語好感」とする）が高くなる傾向であることに着目した。そこで、高知県教育センターが「中学校国語授業改善プロジェクト事業」で取り組んでいる国語好感度尺度（中学校版）をもとに小学校においての国語好感度尺度を作成した。その尺度を用いて、国語好感（学習達成感・協同達成感・学習有能感・生活実用感）と「思考力」との関係を調べるとともに、国語好感を高める指導開発を行った。さらに、これらの検証結果と「中学校国語授業改善プロジェクト事業」の資料分析から、小・中学校の連携の在り方を考察した。

キーワード：国語好感、思考力、小・中学校の連携、思考力測定調査

### 1 はじめに

近年、「中1ギャップ」など小学校と中学校の接続における課題から、全国的にも小中一貫教育を行う自治体や小学校と中学校の連携を強化する学校が増えている。その課題における内容については、平成20年1月17日に出された中央教育審議会答申の「発達の段階に応じた学校段階間の円滑な接続」にも書かれている。また、高知県においても、中1ギャップ解消のための小中連携教育に向けて取組を行っている。

高知県の小・中学校の国語科の現状を平成20年度の到達度把握検査と「全国学力・学習状況調査」の結果を合わせてみると、小学校5年から中学校3年までの学年が進むにつれて、全国水準であった正答率指数が次第に減少している。また、平成20年度の到達度把握検査の総合得点の内訳を観点別にみると、「関心・意欲・態度」、「話す・聞く力」、「書く力」が下がってきている。このことから、小学校で培った基礎的な力を中学校で系統的に伸ばす手立てについて小・中学校間で十分話し合われなかったという現状があるのではないかと推測される。これらの結果から、高知県の小・中学校の国語科においても、小学校、中学校ごとに学習内容を完結する立場をとるのではなく、義務教育9年間を通じて確かな学力を身に付けていくことを重視しなければならないことが分かる。

さらに、平成20年度「全国学力・学習状況調査」の国語の分析結果から、高知県の小・中学校の国語科の課題に、「目的や意図に応じて読む力が身に付いていない」、「必要な条件や根拠を明らかにして自分の考えを書くことが身に付いていない」等の共通項がみえた。これらの課題を解決するためには、「読む力」・「書く力」・「話す・聞く力」の基盤を形成する「思考力」の育成を目指して、これまでの国語科の授業の在り方を見直す必要があると考える。まず、「考える力」をつけるための手段や方法、つまり、「考え方」（例：言い換える、比べる、たとえるなど）を教えるための指導が十分ではなかったことが考えられる。また、児童生徒に考えを深める場面を多く体験させていなかったことや教科書教材の内容の指導にとどまっていたことも挙げられる。このようなことが、児童生徒に「思考力」を十分に育てることができず、日常生活に生きてはたらく国語の力を身に付けさせなかったのではないかと考える。

そこで、本研究では、これらの課題を解決するために、「考える力（思考力）」の育成に焦点を置いた。また、小・中学校の連携を図る方策として、平成20年7月に策定された「学ぶ力を育み心に寄りそう緊急プラン」に位置付けられた事業の一つである「中学校国語授業改善プロジェクト事業」の中で、中学校国語科教員の授業改善のために活用している国語好感度の尺度を使い、その研究を

参考に進めていくことにした。この国語好感度尺度は、各因子の変容から、生徒の「国語が好き」という意識を高めるためには、どこに授業改善を図るとよいかを考えるための「ものさし」として、活用しているものである。さらに、国語好感の各因子と「思考力」との関係も調査することにした。

以上のことから、小・中学校の連携における「思考力」を育む授業づくりの指導開発の研究を進めていこうと考える。「思考力」の育成を根幹においてこそ、高知県の児童生徒たちに「生きる力」に必要な「言語力」を身に付けさせることができると考える。

## 2 研究目的

本研究では、「全国学力・学習状況調査」(国語A・B)で学力階層の上位ほど、国語科の授業に対する好きという感情(以下「国語好感」とする)が高くなる傾向であることに着目した。そこで、高知県教育センターが「中学校国語授業改善プロジェクト事業」で取り組んでいる国語好感度尺度(中学校版)をもとに、国語好感を高めるための授業を実践することが、児童生徒の「思考力」の育成に効果があるのではないかと考え、研究仮説を設定した。

### 研究仮説

小・中学校の連携を通して、国語好感(学習達成感・協同達成感・学習有能感・生活実用感)を高めていくような授業づくりを行えば、児童生徒の「思考力」は高まるだろう。

## 3 研究内容

### (1) 基礎研究

ア 平成20年度「全国学力・学習状況調査」の高知県の国語の結果分析(高知県教育委員会事務局2008資料より)

#### (ア) 小学校の課題

- a 目的や意図などに応じて、文章構成や語句の使い方などを的確に押さえながら読む力が身に付いていない。
- b 目的・意図に応じ、必要な条件を満たして、自分の考えを書いたり文章を書き換えたりする力が身に付いていない。
- c それぞれの情報を関係付けて読み取ったり書いたりすることができていない。

#### (イ) 中学校の課題

- a 書かれた目的を考えて表現の特徴をとらえたり、自分の表現に生かしたりするなど、目的や意図に応じて読む力が身に付いていない。
- b 根拠を明らかにして自分の意見を書いたり、論理の展開を工夫して書いたりすることができていない。また、書いた文章を視点をもって推敲したり、評価・批判したりすることができていない。
- c 漢字や語句、書写の学習内容を実生活で活用する力が身に付いていない。

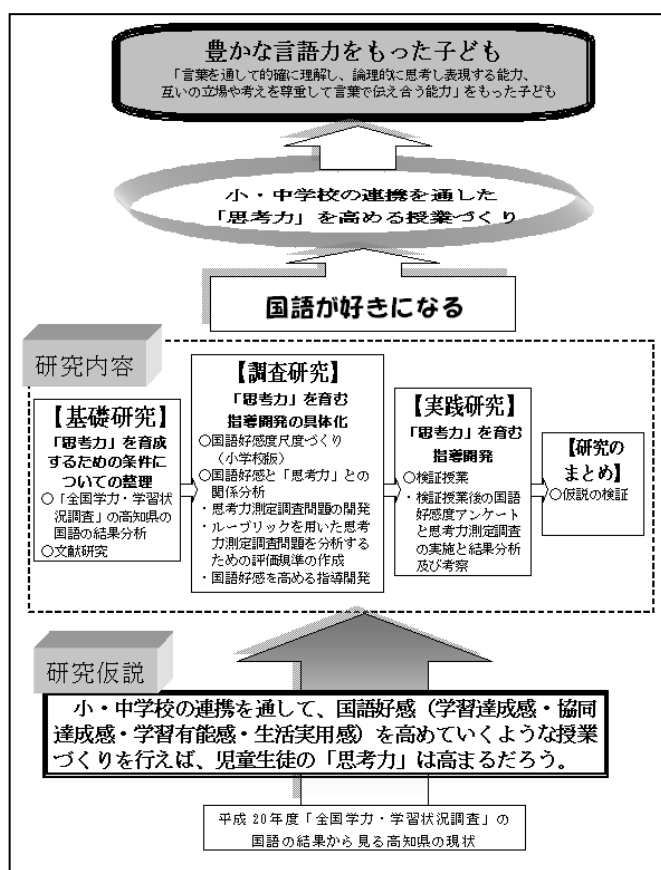


図1 研究構想図

(ウ) 小・中学校に共通した課題

- a 目的や意図に応じて読む力が身に付いていない。
  - b 必要な条件や根拠を明らかにして自分の考えを書くことが身に付いていない。
- 以上の共通項から、「思考力」の育成に焦点を当てる重要性を確認した。

イ 「思考力」を育成するための条件について

平成16年文化審議会答申の「これからの時代に求められる国語力」の中に述べられている「考える力」の内容を本研究における「思考力」の定義として用いた。

「考える力」とは、分析力、論理構築力などを含む、論理的思考力である。  
 分析力とは、言語情報に含まれる「事実」や「根拠の明確でない推測」などを正確に見極め、さらに、内在している論理や構造などを的確にとらえていける能力である。また、自分や相手の置かれている状況を的確にとらえる能力でもあり、知覚（五感）を通して入ってくる非言語情報を言語化する能力でもある。  
 論理構築力とは、相手や場面に応じた分かりやすく筋道の通った発言や文章を組み立てていける能力である。（平成16年文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力」）

これらの内容から、「思考力」の観点を「事実と推測を見極める力」、「論理や構造をとらえる力」、「状況をとらえる力」、「言語化する力」、「発言や文章を組み立てる力」ととらえた。

ウ 国語好感の具体化

国語好感各因子についての具体化を行い、整理をした。

国語好感各因子の定義	めざす児童生徒の姿	国語好感を高める授業場面	国語好感を高めるための手立て
学習達成感 (学習を成し遂げること)	学習課題を最後までやり遂げ、「できた」、「わかった」と思う姿	1時間の授業の中や単元全体を通して、明確な学習目標をもち、課題を解決していく場面	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 児童に学習の達成目標を具体的に示し、学習の見通しや学びの実感をもたせる。</li> <li>○ 全員が取り組むことができるような発問や活動を設定する。</li> <li>○ 1時間の中で必ず、自分の考えを「書く」活動を取り入れ、考える時間を確保する。</li> </ul>
協同達成感 (仲間と学び合うことで新しい学びが得られること)	仲間の意見を尊重し、自分もかかわりながら、取り組む姿	協同的に学び合う場面	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 一人でしっかりと考えさせた後、二人組で意見を交流させる時間を設定する。</li> <li>○ 交流では、声に出して自分の考えを話すことや相手の話をうなずきながら聞くこと、相手の考えをノートに記録するなど話合いの仕方の指導を徹底させる。</li> <li>○ 目的意識をもたせた交流場면을設定する。</li> </ul>
学習有能感 (自分を価値あるものだと認めること)	自分のがんばりを認め、次への意欲に結び付ける姿	自分のがんばりを振り返ったり、仲間から認められたりする場面	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 教師は、児童の学びの成長をとらえ、声かけ等で評価する。</li> <li>○ 自分の成長に注目させ、自己評価させる場面を設ける。</li> <li>○ 仲間から認められる相互評価の場面を設ける。</li> </ul>
生活実用感 (学習したことが日常生活に役立つと感じること)	これまでの知識・理解を日常生活に生かしている姿	学習したことを他教科や日常生活に結び付け、活用していく場面	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 日常生活と結び付けて考えることができるような展開や資料等の工夫を行う。</li> <li>○ 学んだことをもとにして、自分の生活と結び付いた事柄について文章を書く。</li> <li>○ 学んだことを使って、他の説明的な文章を読む力をもたせる。</li> </ul>

(2) 調査研究

ア 国語好感度尺度づくり（小学校版）について

(ア) 調査の概要

平成21年7月、県内5校の小学校第5・6年生を対象に、「中学校国語授業改善プロジェクト事業」で用いた国語好感度尺度づくりのための28項目のアンケートを実施し、591名の児童から回答を得た。すべての回答について、統計分析を行った。

(イ) 結果分析（表1）

表1 小学生の国語好感尺度の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

項目内容		F1	F2	F3	F4	
<b>F1:学習有能感(α=.86)</b>						
Q11	先生が出した課題ができて、仲間から尊敬された。	.86	.09	-.21	-.03	
Q22	国語ができるようになって、他の人より優れているような気持ちになった。	.83	-.19	.07	-.02	
Q23	国語ができて、先生や仲間に認められた。	.71	.19	-.10	-.01	
Q1	質問に答えて、先生からほめられた。	.68	.04	-.08	.07	
Q3	先生や仲間にわかりやすい言葉で説明ができるようになった。	.52	.02	.26	-.04	
Q5	文章が仲間よりたくさん書けた。	.47	-.03	.32	-.06	
<b>F2:協同達成感(α=.91)</b>						
Q27	仲間と国語の問題を考えた。	-.05	.84	-.05	-.02	
Q24	先生からの質問を仲間と一緒に考えることができた。	.03	.82	-.01	-.02	
Q14	授業中、仲間と学び合いができた。	-.06	.81	.04	-.02	
Q12	国語を勉強したことで仲間の気持ちが理解できるようになると感じた。	.14	.53	.02	.10	
Q4	班やグループの仲間から、自分の意見以外に新しい意見が聞けた。	.01	.52	.18	.03	
Q17	班やグループで、問題がわからなかった仲間が理解できるようになった。	.19	.52	-.03	.14	
Q10	班やグループで、話し合った内容がまとめられた。	.10	.51	.17	-.05	
Q26	国語の授業で、新しい自分の考えをもつことができた。	.12	.45	.12	.14	
<b>F3:学習達成感(α=.84)</b>						
Q20	本や新聞の漢字を読むことができると感じた。	-.08	-.05	.81	.02	
Q7	本や新聞の内容を理解できると感じた。	-.16	.09	.80	-.04	
Q8	国語の授業内容が理解できた。	.09	.16	.50	.08	
Q9	筋道だった考え方ができるようになった。	.31	.08	.48	-.06	
Q28	難しい漢字が読めたり、書いたりすることができた。	.05	.02	.43	.10	
Q22	国語の授業で、目的に応じて資料を読むことができた。	.18	.12	.43	.05	
<b>F4:生活実用感(α=.86)</b>						
Q25	勉強で得た知識は、いずれ仕事や生活をする上で役立つと感じた。	.05	-.01	-.08	.87	
Q16	国語で勉強したことが、将来役立つと感じた。	.08	-.08	.03	.81	
Q18	勉強をしないと、将来仕事をする上で困ると感じた。	-.19	.12	.01	.76	
Q6	国語で勉強したことが、日常生活で役立つと感じた。	.09	-.01	.27	.46	
N=591		因子間相関		F2	F3	F4
		F1	.76	.73	.59	
		F2		.77	.70	
		F3			.69	

28項目のうち24項目が残り、4因子（学習達成感・協同達成感・学習有能感・生活実用感）が残る結果となった。また、全体的に5年生の方が6年生より国語好感のポイントが高く、学習有能感においては女子の方が男子よりも高いことが明らかになった。これらのことから、小学校では、発達段階や男女によって国語に対する意識に違いがあることが明らかになった。

(ウ) 中学校との比較分析及び考察

「中学校国語授業改善プロジェクト事業」における調査（県内6校の中学校第1・2年生714名）と比較し、以下のようにまとめた。

	学習達成感	協同達成感	学習有能感	生活実用感	その他
中学校	因子として残らなかった。	「国語を勉強したことで仲間の気持ちが理解できるようになると感じた。」は、入っていない。	全体的にポイントが低い。	「国語で勉強した知識を使う喜びを味わった。」は、学習達成感から生活実用感に入った。	学年差が見られない。
小学校	「本や新聞の漢字を読むことができると感じた。」「本や新聞の内容を理解できると感じた。」は、生活実用感から学習達成感に入った。	「新しい自分の考えをもつことができた。」は、学習達成感から協同達成感に入った。	女子の方が男子よりもポイントが高い。	他の因子よりも全体的にポイントが高い。	全体的に5年生の方が、6年生よりもポイントが高い。
考察	小学校と中学校における発達段階の違いが、顕著に見られる。	小・中学生は、ペア学習や全体での意見交流の中で、自分の考えを見直す経験をしているため、他者のかかわりの中で新しい考えが生まれると感じている。	中学生は、自己肯定感が低くなる時期であるため、より一層、学習有能感を高めさせる授業づくりが必要である。小学校では、男女の違いがあることを考えた授業づくりが必要である。	小・中学生は、日常生活と国語の授業を結び付けてとらえている。特に、中学生は、その傾向が強く見られる。	小学校高学年頃から、ものごとに対するとらえ方に変化が現れ始める時期である。ピアジュの発達理論での形式的操作期へと移行する時期と一致する。

これら小・中学校の国語好感度尺度づくりから、小学生と中学生の国語に対するとらえ方の違いが明らかになった。特に、学習達成感において、中学校では因子として残らず、小学校では残るといふ大きな違いが現れた。これは、素直に「できた」、「わかった」と感じることが出来る小学生と自分を見つめ高い達成感を求めるようになっていく中学生の発達段階の違いから、このような結果が得られているのではないかと考える。このような変化は、小学校5・6年生から徐々に現れてくるものであるため、この時期から学習達成感をもたせるような工夫をより一層行う必要がある。これらのことを踏まえた学習指導を行うことの大切さが本調査で分かった。

イ 思考力測定調査問題の開発

「思考力」がどのように身に付いているのかをはかるものとして、問題を作成した。問題は、「思考力」の定義にもとづき、三森ゆりか『子どものための論理トレーニングプリント』、工藤順一『子どもの「考える力」を伸ばす国語練習帳』、広島県安芸高田市立向原小学校「論理科」での論理力チェックテストを参考に8問(図2)作成した。

ウ 国語好感(学習達成感・協同達成感・学習有能感・生活実用感)と「思考力」との関係

(ア) 調査の概要

平成21年12月、県内2校の小学校第5・6年生を対象に、国語好感度尺度づくりで明らかになった24項目のアンケート(国語好感度アンケート)と思考力測定問題を45分の時間内で実施し、239名の児童から回答を得た。思考力測定調査問題の回答は、ループリックを用いて作成した評価規準をもとに点数化を行った。その数値と国語好感度アンケートの結果について統計分析を行った。

(イ) ループリックを用いた思考力測定調査問題を分析するための評価規準の作成

「思考力」の定義にもとづき、以下のような評価規準を作成した。

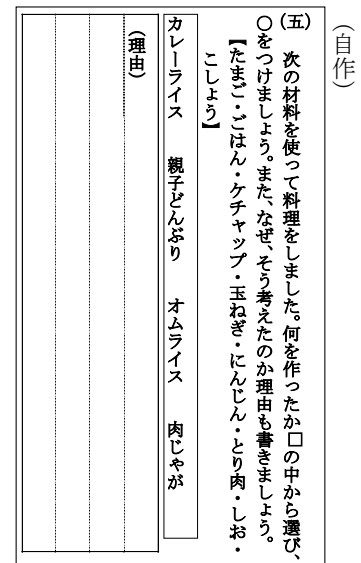


図2 思考力測定調査問題

「思考力」の観点	番号	設問	評価規準					
			3点	2点	1点			
事実と推測を見極める力	四	次の文章に合う写真を選んで、選んだ理由を書きましょう。 『この絵文字は、こわれやすい品物を送る時に箱にはってあるものです。「こわれやすい物なので、取りあつかいには、注意してください」という意味がわかりますね。』	正解の絵文字の特徴や他の絵文字との比較で理由を書いている。	正解を選んだり、理由を自分なりに書いている。	正解を選んでいるが、理由が無記入、または、理由として成り立たない。			
	五	次の材料を使って料理をしました。何を作ったか□の中から選び、○をつけましょう。また、なぜ、そう考えたのか理由も書きましょう。【たまご・ごはん・ケチャップ・玉ねぎ・にんじん・とり肉・しお・こしょう】 <table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td>カレーライス</td> <td>親子どんぶり</td> <td>オムライス</td> <td>肉じゃが</td> </tr> </table>	カレーライス	親子どんぶり	オムライス	肉じゃが	正解の料理の材料の必要性や他の料理との比較で理由を書いている。	正解を選んだり、理由を自分なりに書いている。
カレーライス	親子どんぶり	オムライス	肉じゃが					
論理や構造をとらえる力	二	次の言葉を三つずつ、グループに分け、分けた理由を書きましょう。 バナナ にんじん とうふ パン もやし ハム	言葉の特徴をとらえてグループ分けができています。	自分なりの理由でグループ分けができています。	グループ分けの条件を満たしていない。 理由が無記入、または、理由として成り立たない。			
	六	次のものを具体的なものは抽象的に、抽象的なものは具体的に言いかえましょう。	すべて条件を満たしている。(正解)	どちらかが条件を満たしている。(どちらかが正解)	どちらも条件を満たしていない。(どちらも不正解)			

状況をとらえる力	三	写真を見て、現在の自分たちの生活をく らべ、同じところとちがうところをたくさ ん見つけ、箇条書きで書きましょう。	同じところや違 うところを6つ以 上見つけ、文章であ らわしている。	同じところや 違うところを3 つ～5つ見つけ、 文章であらわし ている。	書けていると ころが2つ以下 である。 単語だけで書 いている。
	八	左の絵を見て、なぜそんな表情をしてい るのか理由を考えてふきだしに書きましょ う	問題文の表情を もとにして文章で 4つとも書いている。	自分なりに文 章にして4つ書 いている。	書けていると ころが3つ以下 である。
言語化 する力	一	次の言葉から、思いついた言葉を次々に 線でつなげましょう。(5分間)	関連性のある言 葉を25以上書いて いる。	関連性のある 言葉を14～24書 いている。	関連性のある 言葉が13以下で ある。
文章を組み 立てる 力	七	前後の文につながるように、ア～エの文 を口順に順番にならべましょう。また、なら べた理由も書きましょう。	正解を選んでお り、問題の文章の叙 述をもとに理由を 書いている。	正解を選んで おり、理由を自分 なりに書いている。	正解を選んで いるが、理由が無 記入、または、理 由として成り立 たない。

(ウ) 分析結果 (表2・3)

国語好感度各因子別に集計し、平均値以上を高群、平均値以下を低群として、思考力測定調査の平均値と分散分析を行った。(表2) また、国語好感度各因子と思考力測定調査との相関分析を行った。(表3)

(エ) 考察

四つの国語好感因子すべてに思考力測定調査において有意差があることが分かった。また、国語好感が高い児童は「思考力」が高いということも分かった。このことから、国語好感を高めるような授業づくりを行うことは、児童の「思考力」を高めることに有効であることが分かる。これらの結果をもって、「国語が好き」にさせる検証授業に向けて指導開発を行う。

(オ) 国語好感を高める指導開発

a 学習達成感を高めるために

(a) 学んだことを活用して「〇〇のおくりもの」という文章を単元の最後に書かせる。

(b) 第1学年教材「いろいろなふね」を使って、児童の既知既習の確認を行う。

(c) 学習課題を達成させるために、毎時間ワークシート(図3)やヒントカード(図4)を用意する。

(d) 文と文をつなぐ時に必要な接続語を示した手引きを用意する。

(e) 考える力をつけるための手段や方法を発達段階ごとに示した『小・中学校を通した「考え方」系統表』(表4)を整理し、「比べる」、「仮定する」、「ひらめきを次の物事へつなげる」という考え方をを用いる。

表2 国語好感各因子別の高群と低群における思考力測定調査の平均値(標準偏差)及び分散分析				
■ 学習有能感の高群・低群における思考力測定調査の平均値(標準偏差)及び分散分析結果				
下位尺度(因子)		学習有能感		F 値
		高群	低群	(1, 238)
		N=107	N=132	
思考力	平均値	2.43	2.28	6.86**
測定調査	(標準偏差)	(0.44)	(0.43)	**p<.01
■ 協同達成感の高群・低群における思考力測定調査の平均値(標準偏差)及び分散分析結果				
下位尺度(因子)		協同達成感		F 値
		高群	低群	(1, 238)
		N=123	N=116	
思考力	平均値	2.41	2.28	5.40*
測定調査	(標準偏差)	(0.42)	(0.47)	*p<.05
■ 学習達成感の高群・低群における思考力測定調査の平均値(標準偏差)及び分散分析結果				
下位尺度(因子)		学習達成感		F 値
		高群	低群	(1, 238)
		N=141	N=98	
思考力	平均値	2.43	2.23	12.5**
測定調査	(標準偏差)	(0.41)	(0.45)	**p<.01
■ 生活実用感の高群・低群における思考力測定調査の平均値(標準偏差)及び分散分析結果				
下位尺度(因子)		生活実用感		F 値
		高群	低群	(1, 238)
		N=153	N=86	
思考力	平均値	2.38	2.29	2.69
測定調査	(標準偏差)	(0.29)	(0.36)	

表3 思考力測定調査と国語好感因子の相関分析					
国語好感					
		学習有能感	協同達成感	学習達成感	生活実用感
思考力	相関	0.24**	0.26**	0.34**	0.18**
測定調査	係数				
Pearson の相関係数					**p<.01
N=239					

「森林のおくりもの」⑥ 五年 名前

今日の課題 月 日

☆富山和子さん（筆者）の考えをまとめるコツ

一 結論部をしっかりと読む。  
二 今までの学習を思い出そう。これまでのワークシートを見よう。  
三 筆者の考えが分かる言葉や文に線を引く。

筆者の考えが分かる言葉や文を見つけよう！

○ 問いかけの文  
○ 文末の書き方  
○ 強調した書き方  
○ 繰り返した書き方  
に注目しよう。

四 線を引いた言葉や文をつなげて、三行から五行になるようにクレーン書こう。多すぎた場合は、文をけすたり、他の言葉にかえたりしよう。五 できた文がおかしくないか、声に出して読んでみよう。

筆者の考えをまとめた文章

「要旨」のワークシート

☆なぜ、筆者は「森林のおくりもの」という題名をつけたと思いますか。

図3 ワークシート

「森林のおくりもの」① ヒントカード

☆「森林」という言葉から、自由にイメージを広げてみよう。

「考え方」ひらめきを次の物事へとつなげる（マッピング）

（森には）何がある？  
何がいる？  
何がとれる？  
そこで、何をやる？

森林と聞いて、どんな色が思い浮かぶ？  
森林と「な」かまになる言葉は？

森林はどこにある？  
森林の大きさは？  
森林の形はどんな感じ？

① 上の問いに対して言葉を思い浮かべよう。  
② うかんだ言葉を森林の周りに〇で囲んでたくさん書きましよう。  
③ 新しく書いた言葉に対してさらさら言葉を書きましよう。

図4 ヒントカード

表4 小・中学校を通じた「考え方」系統表

ピアジェの知的能力段階及び学年		前操作期（直感的思考） 具体的思考期（具体的思考）						形式的操作期（抽象的思考）		
		小学校1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	中学校1年生	2年生	3年生
思考力を付けるための「考え方」										
思う・感じる	好き・嫌い、楽しい・苦しいなどの感情をもつこと。	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
順序を付ける	決まりに従って順番を付けること。	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
整理・分類する	共通するものを見つけて、ひとくくりにすること。	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
比べる	同じところ・ちがうところを見つかること。	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
仮定する	「もしも～」と仮定し、実際とは無関係なことを思い描くこと。	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
たとえる	「まるで～のようだ」と別のものに置き換えること。			○	○	◎	◎	◎	◎	◎
言い換える	他の言葉で言い換えること。			○	○	◎	◎	◎	◎	◎
疑問をもつ	「なぜ～」と不思議に思うこと。			○	○	◎	◎	◎	◎	◎
ひらめきを次の物事へつなげる	ある物事から瞬間的に他の物事を頭に浮かべ、関連する物事へとつなげること。			○	○	◎	◎	◎	◎	◎
具体的ににする	例や根拠などを用い、物事をはっきりさせること。			○	○	◎	◎	◎	◎	◎
抽象的にする	共通する物事を一つにまとめること。			○	○	◎	◎	◎	◎	◎
選択する	目的に沿って、物事を選ぶこと。			○	○	◎	◎	◎	◎	◎
推論する	ある事柄をもとに他のことを推測すること。					○	○	◎	◎	◎
固定的な考えでみる	自分のこれまでの経験を通して物事を見ること。					○	○	○	○	◎
多面的にみる	全体と部分、内と外といった別の視点からみるなど物事をいろいろな方向からみること。					○	○	○	○	◎

○身に付けさせたい時期

◎十分身に付けさせたい時期

b 協同達成感を高めるために

- (a) 一人でしっかりと考えさせた後、二人組でお互いの考えを話し合う時間を毎時間設ける。
- (b) 教材文の文章から理由を探させたり、自分の考えと比べて同じところ、違うところをはっきりさせたりして分かりやすく話させる。
- (c) 友だちによりよく伝えるという目的意識をもたせ、声の大きさや速さ等の指導を行う。
- (d) 自分の考えを深めるために、友だちの考えを自分のワークシートに朱書きさせる。

- c 学習有能感を高めさせるために
  - (a) 接続語を使って分かりやすく文章に書いている、表情豊かに音読をしている等、児童の具体的な成長を捉え、声かけや付箋で評価する。
  - (b) 授業の終わりに学習課題について自己評価させる場面を設け、分かったことやできたことについて振り返らせる。
  - (c) 友だちから認められる肯定的な相互評価の場面を設ける。
- d 生活実用感を高めさせるために
  - (a) 日常生活と結び付けて考えることができるような展開や資料等の工夫を行う。
  - (b) 自分の生活と結び付いた事柄についての文章を書く。
  - (c) 他の説明的な文章を使って、読む力の活用性に気付かせる。

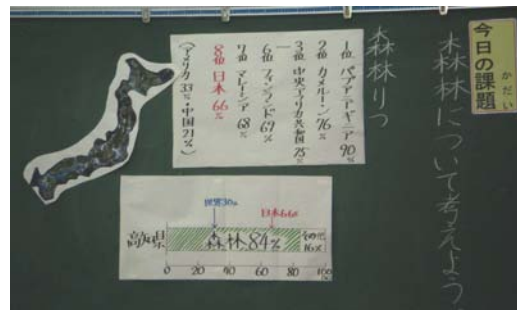


図5 森林に関する資料

(3) 実践研究

ア 検証授業内容 (A小学校 第5学年 24名 平成21年11月 全10時間 実施)

(ア) 対象学年設定の理由

第5学年は、ピアジェ (1896~1980) の発達理論によると、思考が具体から抽象に移行する時期にあたる。また、平成17年中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」には、「義務教育に関する意識調査では、学校の楽しさや教科の好き嫌いなどについて、従来から言われている中学校1年生のほかに小学校5年生時点で変化が見られ、小学校4~5年生段階で発達上の段差があることがうかがわれる。」と述べられている。これらのことから、「思考力」を育成する上で第5学年が特に大切な時期であると考え。さらに、この時期に必要なのは、論理的・抽象的な言葉の育成ができる説明的な文章の学習であると考え、以下の教材を設定した。

(イ) 単元名・教材名

単元名 いろいろな環境問題について考えよう

教材名 「森林のおくりもの」富山和子 (東京書籍 5年下)

(ウ) 検証授業の概要

時	学習内容	学習達成感	協同達成感	学習有能感	生活実用感
1	教材文に関心をもち、学習計画を立てる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「ひらめきを次の物事へつなげる (マッピング)」という「考え方」を使って表現させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 感想について二人組で意見を交流させる。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本や高知県の森林についての資料を提示し、自分たちの身近にある森林について興味・関心をもたせる。</li> </ul>
2	意味のまとまりごとに教材文の文章構成を大まかにとらえる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 文章全体を見通すため、全文を1枚のプリントに写したワークシートを用意する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一人で考えた後、二人組で交流させ、全体交流を行う。</li> </ul>		
3	筆者の工夫を見付けながら、日本人の「木のくらし」について読み取る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 二つの文章について、「比べる」考え方を使って考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 筆者の述べ方について、交流を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1時間で分かったことについて振り返らせる。</li> </ul>	



4	筆者の工夫を見付けながら、「紙」、「火」としてのおくりものについて読み取る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>「目的」と「使われ方」に分けてワークシートに整理させる。</li> <li>「仮定する」という「考え方」を使って、「紙」のない生活を考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「紙」のない生活について、交流を行う。</li> </ul>		
5	筆者の工夫を見付けながら、森林の「別のおくりもの」について読み取る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>「比べる」考え方をを使って、教科書の文章と事例の順番を変えた文章とを比べ、なぜ、その事例の順になっているのかを考えさせる。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>前時の学習の様子や児童の音読の様子から、具体的にほめる。</li> </ul>	
6	筆者の考えを読み取る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>事実と筆者の考えを区別させながら筆者の考えが分かる文を探させ、二文に線を引かせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>インタビューする人と筆者になったつもりで、まとめた要旨について、二人組で交流させる。</li> </ul>		
7	自分で設定した「〇〇のおくりもの」について、書くための材料や資料を集め、メモを書く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>事例を考えるときは、「ひらめきを次の物事へつなげる（マッピング）」考え方をを使って表現させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>考えた構成について二人組で交流させる。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>自分たちの身の回りにある事柄から自分たちを支えてくれているものをたくさん考えさせた後、特に具体的な事例が思い浮かぶものをテーマとして選ぶように助言する。</li> </ul>
8 9	教材文の筆者の述べ方の工夫を取り入れながら文章にする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>ポイントを書いた手引きを用意し、持たせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>できた下書きは、二人組で読み合い、手直しのアドバイスをさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教師は、個別に具体的な文章の良い点と改善点とを付箋に書き、意欲を促す。</li> </ul>	
10	書いた文章をお互いに発表し合い、意見交流をする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>友だちの文章についての感想を一言カードに書かせ、一言カードをもとに交流させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>聞くときは「新しく分かったこと」「自分の考えと比べて思ったこと」といった視点をもたせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ワークシートなどからこれまでの学習を振り返らせ、「わかったこと」、「できたこと」など学んだことを記録させる。</li> </ul>	

## イ 検証授業の結果及び分析

### (ア) 分析の概要

検証授業を行った児童を対象に、国語好感度アンケートと思考力測定調査問題を検証授業前と授業後に実施した。そして、国語好感度因子別の平均値と思考力測定調査問題の回答の平均値と合わせて集計し、統計分析を行った。

### (イ) 分析結果（表5）

検証授業前の平均値と授業後の平均値について、授業後に上がったものを上昇群、同じまたは下がったものを非上昇群とする。

ウ 検証授業の成果及び課題

(ア) 成果

協同達成感において、上昇群の平均値が高く有意差がみられたことから、検証授業では、協同達成感が高まり、それによって「思考力」が高まったことが分かった。つまり、協同達成感を高めるための内容が、指導開発の内容として適切だったといえる。今回初めて二人組で毎時間交流することを取り入れた。初めは慣れていないため、話し始めるまでに時間がかかったり、片方が長時間話してしまったりしていたが、単元の後半には楽しそうに話している様子が多く見られた。児童が自分の考えを友だちに話し、友だちの考えを聞くという喜びを検証授業の中で実感することができたからではないかと考える。

他の因子について、この分析結果からは、有意差がみられなかった。しかし、児童の学習の様子やワークシートの分析から、以下のことが分かった。

○ 根拠をはっきりと示して理由を述べた

こと(図6)で、自己評価が高くなり、次の学習課題に対しても自分の考えを書くことできた。つまり、「できた」という学習達成感をもたせたことで、より論理的な文章を書くことにつなげることができた。

○ 「○○のおくりもの」では、呼びかけの文章を取り入れる、一文を短くする、内容を考えた段落構成を行う等工夫を取り入れた文章になっていた。つまり、教材文を学ぶ目的をもたせるといって、相手を意識した文章構成を考慮することができた。

○ 教師の肯定的な評価やアドバイス(図7)が、学習有能感を高めるための手立てとなり、児童は自分で考えを整理しながら意欲的に文章を書くことができた。

表5 国語好感各因子別事前事後の上昇群・非上昇群における思考力測定調査の平均値(標準偏差)及び分散分析				
■ 学習有能感の上昇群・非上昇群における思考力測定調査の平均値(標準偏差)および分散分析結果				
		学習有能感		F 値
下位尺度(因子)		上昇群 N=7	非上昇群 N=13	(1, 19)
思考力測定調査	平均値 (標準偏差)	2.48 (0.22)	2.52 (0.30)	0.29
■ 協同達成感の上昇群・非上昇群における思考力測定調査の平均値(標準偏差)および分散分析結果				
		協同達成感		F 値
下位尺度(因子)		上昇群 N=11	非上昇群 N=9	(1, 19)
思考力測定調査	平均値 (標準偏差)	2.62 (0.19)	2.36 (0.30)	5.81*
*p<.05				
■ 学習達成感の上昇群・非上昇群における思考力測定調査の平均値(標準偏差)および分散分析結果				
		学習達成感		F 値
下位尺度(因子)		上昇群 N=8	非上昇群 N=12	(1, 19)
思考力測定調査	平均値 (標準偏差)	2.50 (0.24)	2.50 (0.30)	0.00
■ 生活実用感の上昇群・非上昇群における思考力測定調査の平均値(標準偏差)および分散分析結果				
		生活実用感		F 値
下位尺度(因子)		上昇群 N=11	非上昇群 N=9	(1, 19)
思考力測定調査	平均値 (標準偏差)	2.58 (0.14)	2.40 (0.36)	2.38

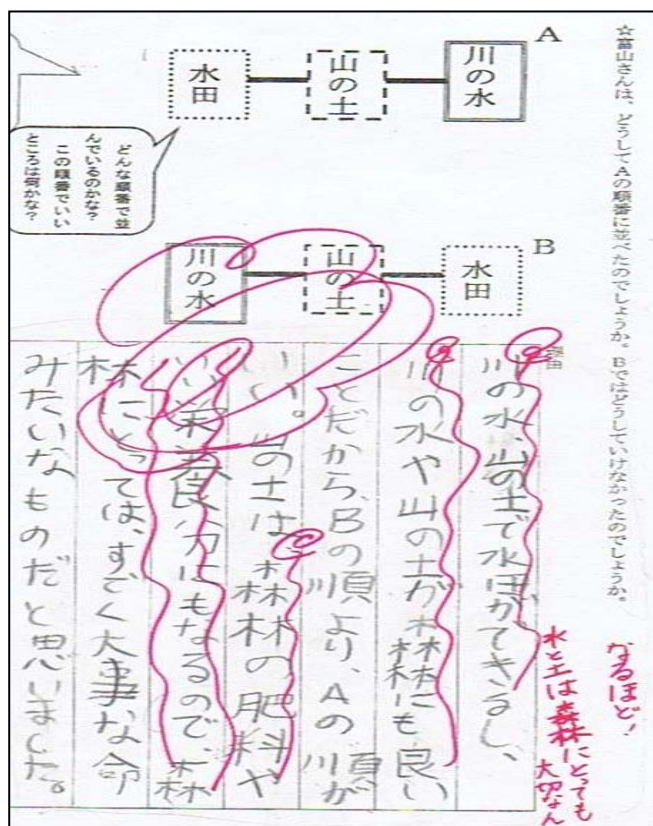


図6 児童のワークシート

- 生活実用感を高めるために行った「○○のおくりもの」では、自分の生活と関連させたことで、児童は身近な材料を使って説明的な文章の構成を考えながら書くことができた。

他の因子についても、このような効果があったことから、国語好感各因子を高めることは、「思考力」を高めることにつながると考える。

(イ) 課題

- a 協同達成感以外の他の因子については、以下の内容を取り入れた指導開発が必要であったと考える。

- (a) 学習達成感を高めるためには、教材内容に関する新聞記事をみつけて読ませる活動の取り入れ、図書室の活用時間の設定も効果的だと考える。また、書くことに抵抗を少なくするために、単元が進むにつれて文字数を増やしていく等の段階を追って文章を書かせることが必要である。

- (b) 学習有能感を高めるためには、相互評価の際の充実も大切である。どこをどう見て何を言ったらいいのかといった見方や伝え方の具体的なモデルを児童生徒に示す。
- (c) 生活実用感を高めるためには、教材内容について家庭で話合うように学級通信で呼びかけたり、家庭学習に出したりするといった活動を取り入れる。

これらの課題は、どの学年での学習にも取り入れることができると考えられるため、今後、国語の授業づくりを行う際に役立たせたい。

- b 検証授業を通して、最も難しさを感じたのは、学習達成感を高めさせることであつた。指導時間を延長するのではなく、45分という限られた時間の中で学習課題を達成させるためには、様々な展開や指導の工夫が重要であると実感した。検証授業を行うに当たって準備していた手立て以上に、一人一人の児童の実態に応じて何種類かのヒントカードを用意したり、その児童が取り組むことができる学習課題に変更したりするなどの細かい手立てが必要である。国語の授業の中で、「できた」、「わかった」と児童に思わせるものは何か、どうすれば学習達成感をもたせることができるのかということこれから追究していきたいと考えている。
- c 思考力測定調査問題については、先行研究を参考にして思考力の定義をもとに問題づくりを行い、定義をもとにした評価規準にそって評価を行うという手順を踏み作成はしたが、信頼性の検証が十分であるとはいえない。したがって、その問題と思考力との整合性を見極める尺度づくりなどの研究が必要であったと考える。

4 研究のまとめ

- (1) 小・中学校における国語好感を活用した指導開発

ア 連携を深めるために（「中学校国語授業改善プロジェクト事業」の資料より）

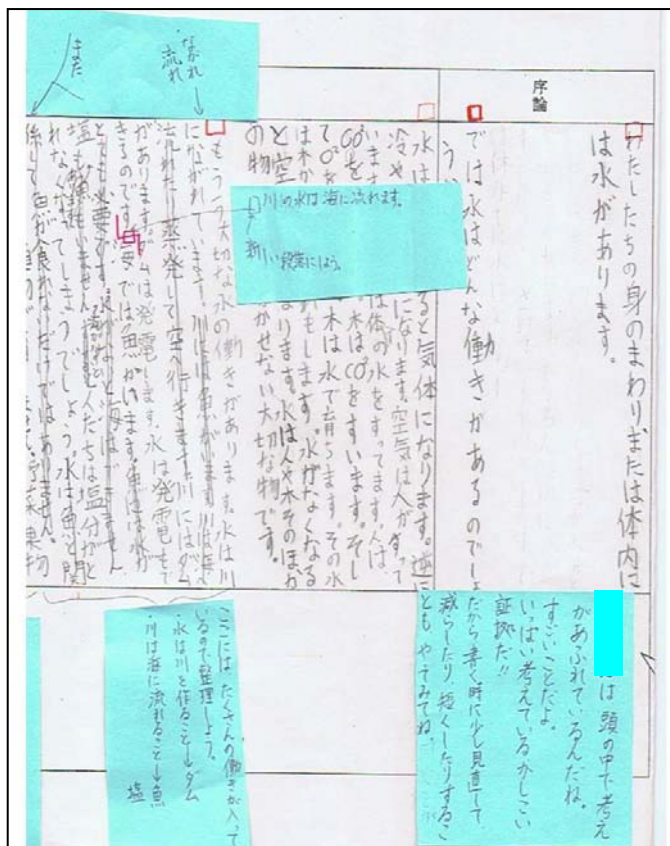


図7 児童のワークシート

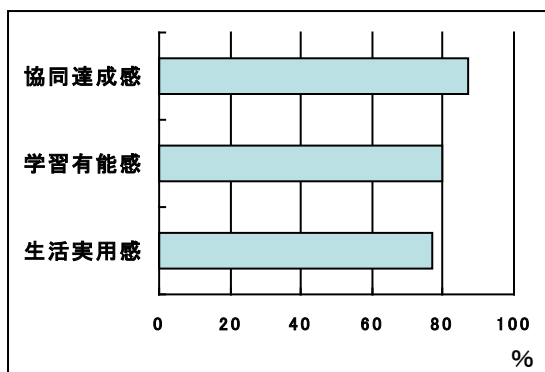


図8 「中学校国語授業改善プロジェクト事業」の各因子の上昇率

- (ア) ペアで学習する楽しさを実感した生徒が多かった。それが、個人のやる気や思考に反映されたのは、新たな発見であり、今後の授業展開に大いに役立った。
- (イ) 目標を具体化し、小テストなども取り入れながら、短いスパンで評価活動を行った。何がどのようにできれば良いのかを生徒自身に分からせ自己評価させることが大切である。
- (ウ) 個人への教師の赤ペン指導は、学習有能感において効果的であった。
- (エ) 生活にありそうな場を設定した授業は、生徒の取り組む姿勢が良かった。
- (「中学校国語授業改善プロジェクト事業」の資料より)

- (ア) 協同達成感においては、受講者の約90%に変容があったという結果(図8)が出ている。検証授業の中でも協同達成感において変容がみられたことから、二人組という学習形態を小・中学校で取り入れることは、連携を行う際に一番取り組みやすい方法だと考える。
- (イ) 中学校でも、小学校で行っている単元テストのように、目標を具体化し、小テストを取り入れることで、中学生の学習有能感を高めさせることができると考える。
- (ウ) 個人への教師の赤ペン指導が中学校で効果があったことと検証授業で教師の書いた付箋に効果があったこととは共通している。これらのことから、肯定的な評価が残るような方法で教師の働きかけを小・中学校で積極的に取り入れることが学習有能感を高めることに有効である。
- (エ) 「中学校国語授業改善プロジェクト事業」の資料(エ)から、日常生活に活用させる国語の場について小・中学校で話合うことが生活実用感を高めさせることになる。

イ より連携を深めるために

- (ア) 教材文にどう書かれているのか等の論理の構成を捉えさせるような発問の工夫を小・中学校で行うことが学習達成感を高めさせ、「思考力」も高めさせると考える。

- (イ) 小・中学校ともに、書く必要性を感じさせたり、書く意欲をもたせたりするような機会や場を多く設定し書かせることが重要である。

- (ウ) 国語好感度尺度を用いた学習指導案(図9)

国語科学習指導案	
平成	年 月 日 曜日 第 校時
年 組	児童(生徒)数 名
<b>1 育成を目指す言語能力</b>	
○ この単元または教材で、育成を目指す主たる言語能力	
例(5年「C 読むこと」(1)ウ)	
<b>2 具体的な言語活動</b>	
○ どの言語活動例に基づくものか(あるいは例示以外に設定したもの)を書く。	
例(5年「C 読むこと」(2)イ)	
<b>3 既習内容との関連</b>	
○ この単元の指導事項及び言語活動例についてこれまでの指導の経過と結果や留意点を書く。	
※ 小学校や中学校の学習内容を系統的・段階的に記入する。	
<b>4 国語好感を高めるための手立て</b>	
(小学校: 学習達成感・協同達成感・学習有能感・生活実用感)	
(中学校: 協同達成感・学習有能感・生活実用感)	
<b>5 単元名(教材名)「</b>	」( )
<b>6 単元(教材)について</b>	
(1) 単元(教材) 観	
(2) 児童(生徒) 観	
(3) 指導観	
<b>7 単元(教材)の目標</b>	
<b>8 単元(教材)の評価規準</b>	
以下略	

図9 国語好感度尺度を使った学習指導案

中学校で国語の授業を行うことによって、共通した視点を用いて授業の具体的な話合いをもつことができる。また、この学習指導案では、国語好感を高めるための手立てを整理するだけでなく、小・中学校の学習内容を系統的・段階的に記入することで、9年間を見通した学習指導ができる。検証授業では、低学年からの積み重ねの大切さを実感した。他教科と違い、国語の力は、

螺旋状に積み重ねていく教科である。例えば、文章の構成について学んだ内容はその単元で終わるのではなく、学んだことを生かして新しい単元でさらに力を付けさせていくことが重要である。このことは、新学習指導要領の解説国語編の小・中学校の両方に、9年間の各学年の目標と内容の系統表が載せられていることや中学校学習指導要領解説国語編に「小学校で習得した」、「小学校で身に付けた」と連携を表す言葉が数多く示されていることから分かる。小学校の力の上に中学校の力が成り立っていることを小・中学校で再確認し、9年間を見通した児童生徒の国語の学ばせ方について一緒に話し合うことが大切である。これが、中1ギャップの解消につながり、さらには、高知県の小・中学校における国語科の課題解消になると考える。

## 5 終わりに

様々な場面で「国語が好き」と児童が感じるためには、第一に温かい学級集団が必要である。「好き」という感情は児童の心に直結しているため、安心した学級集団の中であって初めて、児童は自分たちの考えを出し合い、「できた」、「わかった」と感じ、友だちとの交流を楽しみ、お互いに肯定的に評価をし合え、日常生活に考えを広げることができる。このように、学級経営を含む日頃からの指導も国語好感を高めるためには必要であると考え。

また、国語好感を高める国語の授業を支えるためには、指導する教師自身が「国語が好き」と思う場面を十分知っている必要がある。多くの「国語が好き」と思う場面を知るためには、教師は、児童の立場になって、教材文を読んだり、設定した学習課題について自分の考えを書いたり、教師同士で教材について話し合うような機会を多く持つことが重要である。そうすることにより、個々の児童に対して行う細かい手立てに気付いたり、また、授業の中で児童に適切な評価を行ったりすることもできると考える。

本研究では、国語好感度尺度という新たな視点をもって国語の授業をみることができ、これまでよりも細かい手立てを事前に考えることができた。国語好感度尺度は、授業分析や指導開発を行ううえでの「ものさし」として活用できることが分かった。本研究で得た成果と課題を今後の国語の授業づくりを行ううえでの指針にしたい。また、学校現場に戻り、国語好感度尺度を用いた国語の授業の良さを、他の教師にも広げていきたいと考えている。

※掲載物使用承諾済

## 6 主な引用及び参考文献

- ・高知県教育委員会事務局『平成20年度全国学力・学習状況調査結果 資料』2008
- ・高知県教育委員会事務局『学ぶ力を育み 心に寄りそう 緊急プラン』2008
- ・高知県教育委員会事務局『平成20年度全国学力・学習状況調査結果 資料』2008
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説国語編』平成20年8月
- ・文部科学省『中学校学習指導要領解説国語編』平成20年9月
- ・文化審議会答申『これからの時代に求められる国語力について』平成16年
- ・初等中等教育分科会『義務教育に係る諸制度の在り方について』平成17年
- ・中央教育審議会答申『発達の段階に応じた学校段階間の円滑な接続』平成20年1月17日
- ・中央教育審議会答申『新しい時代の義務教育を創造する』平成17年
- ・ピアジェ, J. & イネルズ, B. 波多野完治ほか訳『新しい児童心理学』白水社、1969
- ・工藤順一『子どもの「考える力」を伸ばす国語練習帳』PHP研究所、2005
- ・三森ゆりか『子どものための論理トレーニングプリント』PHP研究所、2005
- ・千葉県総合教育センター『思考力を高める学習指導法の研究』平成19年・平成20年
- ・広島県呉市立五番町小学校・二河小学校・二河中学校編『公立小中で創る一貫教育』ぎょうせい、2005
- ・広島県安芸高田市向原小学校『研究紀要「櫻の丘に開く窓」』2008年度
- ・安芸高田市立向原小学校編『思考力を育てる「論理科」の試み』明治図書、2008
- ・井上尚美『言語論理教育入門 一国語科における思考』明治図書、1989
- ・高浦勝義 松尾知明 山森光陽編『ルーブリックを活用した授業づくりと評価①小学校編』教育開発研究所、2005
- ・松下佳代『パフォーマンス評価 子どもの思考と表現を評価する』日本標準、2007
- ・市川伸一『学ぶ意欲とスキルを育てる いま求められる学力向上策』小学館、2004
- ・福島県郡山市立橋小学校自主研究公開研究紀要資料『福島県郡山市立橋小学校 実践について』2008